● 東京言語研究所　2019 年度春期講座

		課目（講師）
【１日目】 4 月 20 日 （土）	１限	文法形式と意味の関係（尾上圭介）
		歴史言語学入門の入門（長屋尚典）
	２限	心理・神経言語学－ことばを話す過程を探る（酒井弘）
		社会言語学入門（嶋田珠巳）
	３限	文法と意味（西村義樹）
		音声学－言語音の多様性を探る（中川裕）
	４限	言語哲学への招待（峯島宏次）
		文法原論（梶田優）
【２日目】 4 月 21 日 （日）	１限	言語学概論（大堀壽夫）
		英語史の視点から英語を眺める（堀田隆一）
	２限	認知言語学－＜好まれる言い回し＞の背後にある話者による＜事態把握＞（池上嘉彦）
		生成文法Ⅱ－私たちの言葉の能力を多角的に考える（高橋将一）
	３限	音韻論－音と文法・意味の接点（窪薗晴夫）
		日本語の述語序説：スル、シタ、シテイル（川村　大）
	４限	生成文法への誘い（大津由紀雄）
		意味論への招待（酒井智宏）

１限（10:00～11:20）
２限（11:40～13:00）
３限（14:00～15:20）
４限（15:40～17:00）

20日 （土）	1限	**文法形式と意味の関係** 尾上圭介（東京大学名誉教授） 文は語が集まって構成されている。語はそれぞれに意味を持っている。従って文の意味は、語があらかじめ持っている意味が集まってできあがる。それは疑いようがないことのようにも思える。しかし、そう簡単に言ってしまってよ　いのであろうか。 このような見方は必然的に、文の意味はそれを構成する各部分（各語）の意味に分割できるという信仰を伴っている。例えば「雪は白い」という文と「雪が白い」という文を比べたときそこに見てとれる二つの文の意味の差は、二つの文の形（単語列）の引き算の結果として残る「ハ」と「ガ」の差である、というような見解である。つまり、第一文と第二文の意味の違いは、雪の性質を観念的、抽象的に説明するか、雪のありさまを具体的、現実的に描写するかの違いであって、この差が「ハ」と「ガ」の違い、あるいは助詞としての性質の違いなのだというような了解を持つことになる。 しかし少し考えれば、この了解に無理があることに気がつく（例証は講義の中で）。無論、二つの文の意味の差が何らかに二つの助詞の性質の違いからもたらされることは疑えないが、それを単純に二つの助詞があらかじめ持っている意味の差だと決めつけてしまうところに問題があるのであって、それは「文の意味はそれを構成する語の意味の総和である」という常識的見解の危険を如実に指し示している。 いわゆる助動詞「ウ・ヨウ」（動詞シヨウ形と呼んでもよい）には、終止法の場合だけを見ても、推量の用法（「もう読んだ人もあろう」）と意志の用法（「これをあげよう」）と勧誘の用法（「一緒に映画を見よう」）があるとされている。それは間違いない。しかし、推量と意志と勧誘は「ウ・ヨウ」があらかじめ持っている意味なのであろうか。もしそうだとすれば、一つの語がどのような論理でそのような異次元の複数の意味を持つことができるのであろうか。推量から（話し手の）意志へという意味拡張の筋道は考えられないし、その逆も無理である。それどころか、非終止法の用法（「校長先生ともあろう人が」「あろうはずもない奇跡」など）となると、推量でも意志でもない意味ばかりである（実例は講義の中で）。いったい何が起こっているのか。「ウ・ヨウ」自身の固有の性質とは何か。 それを解きほぐして行くところに、ことばの形と意味のおもしろい関係が見えてくる。

		歷史言語学入門の入門 長屋尚典（東京外国語大学准教授）
		今年度私が理論言語学講座で担当する歴史言語学は言語変化を研究する言語学の分野です。言語の変化に関することなら、音声・音韻から形態論、統語論、意味論に関することまで幅広い現象を扱い、理論的枠組みも伝統的な比較言語学から、社会言語学、言語系統学、用法基盤モデルにいたるまでさまざまなアプローチが存在します。言語学の諸分野の中でも現在最も盛んに研究されている分野の一つです。 この春期講座では、歴史言語学の入門の入門ということで、言語は常に変化し続けるものだという事実をまずは観察してみたいと思います。日本語から世界の言語までさまざまな例を紹介し、どんな変化が起きたか一緒に考えていきながら、歴史言語学において使われる理論的道具立ての一端を紹介します。 歴史言語学というと、ギリシャ語やラテン語などのヨーロッパの古い言語の話のように思ってしまう人もいるかも知れません。しかし、今この瞬間にも自分の言語で起きている変化を理解するときに「役に立つ」分野でもあります。この春期講座ではそのことを理解していただけたらと思います。
	2限	**心理・神経言語学－ことばを話す過程を探る** 酒井　弘（早稲田大学教授）
		今年度の開講科目「神経・心理言語学」では、言語の神経基盤・心理過程を探るためにに利用されるさまざまな調査・実験方法を取り上げますが、春期講座ではそのなかからユニークな方法を一つ選んで紹介します。わたしたちは多くの場合、目の前で起こった出来事をいとも簡単にことばで表現することができます。しかしそのとき、わたしたちの頭の中でなにが起こっているのか、つまり<u>発話を産出する過程はどのようなものなのか</u>、という疑問に答えるのは簡単ではありません。この疑問に答えることを目指して研究を進めるためには、産出過程を刻一刻と追いかけて行くデータ（「オンライン」のデータと呼ばれます）を使う事ができれば最も効果的ですが、人間は比較的短い時間の中でさまざまな発話を産出できることが、オンラインのデータを得る事を困難にしています。さらに問題を複雑にしているのは、文を産出し始めた時、すでに文の組み立ての大半は終わっていると考えられることです。どうすれば、言語学研究者はこのような厳しい制約を克服して必要なデータを得る事ができるのでしょうか。春期講座では、心理言語学研究で使用される代表的な手法の一つである視線計測（eye-tracking）を中心に、言語の産出過程を探る研究について紹介します。簡潔に言語産出研究の歴史を振り返るとともに、日本語とスペイン語の関係節の産出過程を探る研究など、最新の研究事例を挙げて説明します。

		社会言語学入門 嶋田珠巳（明海大学教授）
		「言語学」の前に「社会」が付いて、「社会言語学」。言語学のすこし厳格なイメージも、「社会」言語学になるとどことなく人間味が加わったようで、とっつきやすさを感じるでしょうか。それとも、「社会」が入った分、実際のところはもっと複雑になる、などということもあるのでしょうか。 　そもそも、ことばは人が話すもの。その話者のいるところ、属している集団、社会、コミュニティ。言語を理解するのに、いちいち人を、いちいちコミュニティを意識せずには始まらない。社会言語学のおもしろさはそういったところから展開されます。 　この講義では、社会言語学とはどのような学問領域かを概説したうえで、とくに私がこんなところが楽しい！ 素晴らしい！ と思っているようなことを取りあげたいと思います。今年度は後期に「社会言語学―言語にみる、個人と社会」というテーマで講義を担当します。そこでは「言語接触」と「言語と思考」の諸問題に入りこんでいくのですが、そのイントロダクションを春期講座でお話しようと考えています。
	3限	**文法と意味** 西村義樹（東京大学教授）
		理論言語学講座で今年度後期に私が担当する「認知言語学 I」では、昨年度に引き続き、「（コミュニケーションを含む）言語使用を可能にする知識の中で文法は意味とどのように関係しているのか？」という言語学の根本問題に対する認知文法（cognitive grammar）の考え方を、この理論の創始者である Ronald W. Langacker の著作を深く正確に読み解くことを通して多角的に検討します 　春期講座では、言語にとって文法が不可欠なのはなぜか、文法との関係で問題になる意味とはどのようなものか、文法と語彙はどのように関係しているのか、などの問いへの認知文法の答えを紹介することによって、上記の講義への導入を図ります。
		音声学－言語音の多様性を探る 中川　裕（東京外国語大学教授）
		この講義では、世界の言語音の多様性と普遍性を理解するための２種類の接近法について分かりやすく講義します。接近法の一つは国際音声記号(IPA)に代表され、もう一つは広域音韻類型論に代表されます。解説では、主に分節音を取り上げます。 　この講義によって、音声学（後期）で訓練する調音音声学的技能は、個々の言語音を単に観察・記述する道具ではなく、言語学という学問領域の発展に貢献するための知識体系の一部であることが

わかるはずです。
　国際音声記号の解説の際には、音声学的技能訓練の実践的コツにも触れます。広域音韻類型論の解説の際には、古典的な Maddieson (1984)から最新の研究動向 Everett (2018)までの成果も踏まえます。

References
Everett, Caleb (2018) The similar rates of occurrence of consonants across the world's languages: A quantitative analysis of phonetically transcribed word lists, *Language Sciences*, 69, 125-135.
Maddieson, Ian (1984) *Patterns of Sounds*, CUP.

4限

言語哲学への招待

峯島宏次（お茶の水女子大学特任准教授）

　言語哲学は、理論言語学の中でも特に現代の意味論・語用論と深く関係しています。哲学者・論理学者のフレーゲに始まる言語分析の手法は、文法と意味、論理と形式意味論といった「意味論」の周辺の話題から、話者の意図や推論、コミュニケーションや言語行為といった「語用論」の話題まで、多様な展開を見せています。そこで分析の対象となる言語現象は、″the″（ラッセル）のような歴史的にも重要なものから始まり、″ouch/oops″（カプラン）のような従来の枠にとらわれない表現まで、じつに多様なものとなっています。
　この講義では、理論言語学講座（前期）「言語哲学」への導入として、意味論・語用論の基礎をテーマにお話しします。この春期講座では特に、「言葉の意味」と「話し手の意図」との関係について、グライスに始まり関連性理論に至るまで、現代の語用論の考え方を紹介し、背景にある言語哲学の考え方について理解を深めたいと思います。意図と慣習、理解と推論、意味論と語用論の境界、真理条件と表意・推意といった、この分野の基本的な問題・概念についてお話しします。言語哲学で論じられてきた考え方が、言葉の意味とコミュニケーションの分析にどのように役に立つのか、具体例を見ながら考えたいと思います。

文法原論

梶田　優（上智大学名誉教授）

　意味の研究が重要な段階にさしかかっています。明示性を徹底的に追求してきた「形式意味論」が成熟期に入り、実質的な成果を上げはじめています。当初は、ごく少数の言語の、ごく限られた種類の意味領域（述語構造、量化構造、命題論理など）の、内観でも届きやすい比較的浅い層の意味事象を材料として、もっぱら記述の枠組みの明示化・体系化に集中していました。しかしその作業がある程度進むと、そこで得られた枠組み（理論）を、（場合によっては必要な修正を加えつつ）より多様な言語の、より多様な意味領域に適用することが可能になりました。そして、実際、ここ 30 年余りのあ

		いだにその方向での研究が数多く行われ、内観では届かなかった意味の深部の仕組みが少しずつ見えはじめています。特に、一部で見られる言語類型論と形式意味論の合流とでも言うべき動きは、予想できなかったような発見を次々にもたらしており、注目に値します。また、提案された複数の意味理論の優劣の判定に神経科学の成果を援用する試みも、まだ緒に就いたばかりのようですが、将来的には期待できる動きのひとつです。 今回の春期講座では、上記のような意味研究の動向を、いくつかの具体例によって、概略的に説明します。そのあと5月からの通年講義「文法原論」では、そのような意味研究が文法（特に統語論）の研究とどのように関わり合うか、動的文法理論の観点から考えます。
21日 （日）	1限	**言語学概論** 大堀壽夫（慶應義塾大学教授）
		言語学という学問は、さまざまな下位分野から成り立っています。この講義では、そのすべてを順序立てて解説することはせず（さすがに無理なので）、「語」という誰から見ても基本的と思われるユニットから出発して、そこに含まれる情報のタイプやフォーマットを考えていきます。例えば、「さすがに」という語を過不足なく使うために必要な知識はどのようなものでしょうか。「体たらく」は？　英語ならばthreatenは？　insteadは？　ベトナム語のđượcは？　たかが単語、されど単語。重箱の隅をつついていったら大きな象が出てくるかもしれません。耳、鼻、脚、尾、背中どこを触るかは人それぞれですが（諷喩はここまで）、講義の後半では特に語の表す意味に着目して、創造的な言語使用の諸側面について時間の許す限りくわしく見る予定です。言語学の予備知識がない方も歓迎です。あちこち話しが飛ぶかもしれませんが、散らばった「点」を後からつないでみたら一つの「絵」が見えてくるような進行にしたいと考えています。
		英語史の視点から英語を眺める 堀田隆一（慶應義塾大学教授）
		何年か英語を学んでいると、学び始めの頃に抱いていたような素朴な疑問が忘れ去られてしまうことが多いものです。なぜ A は「ア」ではなく「エイ」と読むのか、なぜ go の過去形は went なのか、なぜ動詞の3単現には -s がつくのか、英語とフランス語・ドイツ語はどのような関係にあるのか，なぜ英語は世界語となりえたのか等々。このような素朴な疑問を改めて思い起こし、あえて引っかかってゆき、まじめに考察するのが、歴史言語学の観点からみる英語学 --- 英語史 --- という分野です。 狙いとしては、4点を掲げます。(1) 現代英語の疑問点に歴史的な視点からアプローチする、(2) 英語史の概略を知る、(3) 英語学・言語学の考え方を学ぶ、(3) 歴史を通じて幅広い柔軟な英語観を形成する。 本講義では、素朴な疑問と英語史の相性の良さについて考察した後、英語史を概観します。続けて、綴字，発音、文法、語彙、英語方言やその他に関

		する素朴な疑問を取り上げながら、英語史的なものの見方・考え方を紹介します。
	2限	**認知言語学–** **＜好まれる言い回し＞の背後にある話者による＜事態把握＞** **池上嘉彦（東京大学名誉教授）**
		同じ＜事態＞であっても、それを表現する際の言い回しは言語が違うとずいぶん違うということがある。例えば、道に迷って人に尋ねるとき、日本語話者なら「ココハドコデスカ」と言うであろうが、英語話者なら「私ハドコニイマスカ(“Where am I?”)」と言う。どの言語の話者でも、自分が母語として＜身につけた＞言い回しは自然だと感じるが、その一方では、他の言語の話者による違った言い回しは何か不自然で、場合によっては、異様にすら感じられることもある。一体、何が起こっているのであろうか。このような状況は、＜事態＞を言語化する際の人の心の働き（認知言語学で＜事態把握＞(construal)と呼ばれる話者による認知的な営み）は画一でなく、豊かな多様性のありうることを教えてくれ、認知言語学での興味深い考察の対象となる。本講では、日本語の具体例を念頭に、語彙・文法面から特定の言い回しに至るまで、必要に応じて他の言語の場合への言及も含めつつ、時間の許す限り、多様な具体例を取りあげてみたい。以下は予定している項目のいくつかである――〔名詞について〕＜複数＞とは ‘x+x+x…’ということか、 ‘x+α’ということか；＜単数＞＝１、＜複数＞≧２ということでよいのか、それから＜単数＞＝１、＜双数＞＝２、＜複数＞≧３ということなのか、〔形容詞に関連して〕中国語の「熱烈歓迎」は、日本語の「熱烈歓迎」と同じ意味か；英語の ‘earth-friendly’と日本語の「地球ニヤサシイ」は同義か；「セマイ」＝＜面積が小さい＞という＜客観的＞な定義の仕方でよいか、〔動詞に関連して〕来るように言われて答えるとき：「イクヨ」と言う言語と「クルヨ」(e.g. ‘I’m coming’)と言う言語；「ココハドコデスカ」と言う言語と「私ハドコニイマスカ」と言う言語. ＜デジタル＞的な意味分析と＜アナログ＞的な意味分析；＜澄ム＞と＜住ム＞と＜済ム＞、cf. ‘settle’. 「春ニナル」と言う言語と「春ガナル」と言う言語；など。
		生成文法Ⅱ－私たちの言葉の能力を多角的に考える 高橋将一（青山学院大学准教授）
		言葉を使用するという私たちの能力を考えてみると、その能力が、周りからの発話をデータとして取り入れ、生まれたあとにゼロから作り上げられているとは考えにくいと思われています。そこで、生成文法理論では、私たち

		は生得的に言葉を使用する能力を持っていると考え、この能力を普遍文法と呼んでいます。本講義では、普遍文法に関する近年の理論的発展を取り上げるとともに、その発展を多角的に考えていきます。例えば、普遍文法の研究では、普遍文法の中身を解明するだけでなく、私たちが、いつ、どのようにして普遍文法を獲得したのかという言葉の起源の問題についても最終的には解明する必要があります。言葉の起源について、現在までに得られている知見を紹介し、それらが理論研究に与える影響を概観します。また、子供が生後間もない時に、言葉に関係するどのような能力を有しているのかを見ながら、私たちは、どのような能力・知識を持って生まれ、言葉を使用することが可能になっているのかを考えていきます。
	3限	**音韻論－音と文法・意味の接点** 窪薗晴夫（国立国語研究所教授）
		今年度の開講科目「音韻論」では、日常生活の身近な素材を使って音韻論の基本的な考え方、研究の楽しさ、分析方法を解説する予定です。この春期講座では少しテーマを絞り、連濁や複合語アクセント、イントネーションが、語や文の構造（意味構造、統語構造）とどのように関わっているのかという問題を考察してみたいと思います。たとえば、「水不足」の「不」はブと濁るのに、「過不足」の「不」が濁らないのはなぜか。「尾白鷲」の「白」は濁るのに、「紋白蝶」の「白」が濁らないのはなぜか。「紅白饅頭」は一つのアクセント単位にまとまるのに、「紅白歌合戦」が二つに分かれてしまうのはなぜか。「怖い目のお化け」の多義性がイントネーションによってどのように区別されるのか。このような素朴な疑問を解きながら、音韻構造と意味構造・統語構造との関係を考察します。連濁やアクセントなどの複数の音韻現象に、共通した意味制約や統語制約が働いていることを指摘し、それらの制約が日本語だけでなく英語や中国語をはじめとする他の言語にも働いていることを解説する予定です。
		日本語の述語序説－スル、シタ、シテイル 川村　大（東京外国語大学教授）
		5月から始まる講義の問題意識について、いくつかの話題を取り上げて述べてみたいと思います。 動詞基本形（スル）、動詞連用形＋タ（シタ）、動詞テ形＋イル（シテイル）は、普通「時間的意味を表す」形、即ちテンス・アスペクト形式だと言われます。それが全くの間違いだとは言いませんが、そのような理解はもしかしたらかなり一面的なのかもしれません。 ①　運動動詞のスルは普通「未来」を表すと言われます（「おれは絶対社長になる」）が、時に眼前の事態を描写する場合もあります（「雨が降ります雨が降る」「ああ、家が燃える、燃える……」）。また、ある環境では「過去」の事態を表すこともあります（歴史的現在の場合、年表や日記の記述）。

		②　シタは、従属節述語の場合に未来の事態を表すことがある（「明日の予選で勝ち抜いたチームが明後日の決勝に出られます」）のはもちろん、主文末でも未来の事態を表すことがあります（（サッカーの試合終了前に）「これでＢチームが勝ったな」）。また、現在の事態なのにシタが出る場合があるのもよく知られています。「太郎はたしか川崎市に住んでいたな」などの「想起のタ」、（探し物を見つけて）「あった！あった！」などの「発見のタ」などです。これらは「ムードのタ」などと呼ばれ、時間的意味とは異次元の用法だと言われる位置づけられることもあります。　③　シテイルには「進行」を表す場合（「犬が走っている」）と「結果の状態」を表す場合（「酒が無くなっている」）とがあることが知られていますが、多くの言語ではこの２つの意味は別々の形式で表すといいます。 「スル、シタ、シテイルは何らかの時間的意味を表し分けている」さらには進んで「スル、シタ、シテイルは時間的意味の表し分けのために存在する」という（何となく世間に浸透している）理解からは、上記の事例をどう説明できるのでしょう。そんなことをお話ししたいと思います。
	4限	**生成文法への誘い** 大津由紀雄（明海大学教授）
		この講義では、生成文法がことばの研究を足掛かりになにをしようとしているのかを正確に、しかし、できるだけ平明にお話しします。 この講義の目的は、①生成文法を《言語事実と向き合わないことが多い言語学》とだけ考えて、敬遠してきた人たちに生成文法の本質とおもしろさを理解してもらう、②生成文法に関心はあるが、「言語生物学 biolinguistics」だとか、「極小主義 minimalism」だとかと聞くとなんとなくとっつきにくさを感じてきた人たちにそれらが意図しているところを理解してもらう、③理論言語学講座「生成文法入門」（本編）の受講を考えているが、最終決断の前に担当講師の顔、語り口、講義内容などを確かめておきたいと考えている人たちに顔見世をして、安心して本編を受講したいという気持ちにさせる、ことにあります。 とくに前提とする知識や技術はありません。
		意味論への招待 酒井智宏（早稲田大学准教授）
		意味論は理論言語学の中で一番とっつきやすい分野に見えて実は一番とっつきにくい分野です。理由はいくつかありますが、ここでは二つあげてみます。 理由 1: 「意味」の研究は「ことば」の研究の中でもっとも重要なものだと思われるかもしれません。しかし実のところ、欧米の言語学では、長らく「意味」のような主観的で不純なものは科学的研究の対象になりえないと考えられ、意味の研究はタブー視されてい

		ました。そうした風潮の中で意味の研究を行っていたのは、言語学者よりもむしろ哲学者や論理学者でした。このため、意味の問題を理解するには狭義の理論言語学以外への目配りが不可欠です。 　理由 2: 実はただの「意味論」という分野は存在しません。存在するのは形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc.であって、「意味論」ではありません。意味の問題はあまりにも多面的なので、研究対象と方法論を限定するのは正当な研究方略です。その反面、XX 意味論と YY 意味論では着眼点が大きく異なり、XX に注目することが必ずしも YY を理解するための助けにならないこともあります。このため、「意味」そのものを理解する(あるいは少なくとも理解した気になる)のは非常に困難です。 　春期講座では、狭義の理論言語学以外への目配りをしつつ、どの立場に立つにせよ意味について最低限心得ておきたい問題の一端にふれてみます。それにより、時代が変わっても意味に関する根本的な問題はさほど変わっていないということを示したいと思います。取り扱う内容は 2018 年度春期講座「意味論」とは異なります。